

第1章

「ベートーヴェンの午後」まで

およそ四十年という比較的短い生涯、異国での悲劇的な結末ということを前提として考えると、久野久子とその人生で最も輝いていた時期は何時頃のことであろうか。

一つは東京音楽学校を卒業した後、新進のピアニストとして囑望され、母校の助教教授に迎えられた明治三十九年（一九〇六）から明治四十四年（一九一一）頃という考え方があつた。また一方で、海外留学が決まり離日記念の演奏会でベートーヴェンの後期のピアノソナタばかりを集めてとりあげた時期という把握もあるが、全生涯を鳥瞰してみると私にはやはり大正五年（一九一六）から同七年（一九一八）の時期がふさわしいように思われるのである。なぜそう考えるかについては、この時期の彼女の事跡とそれに対する世間の評価などを追うことによつて自ずと明らかにできるのでないだろうか。

その時期は久野久子の三十二歳から三十四歳の年齢期にあたり、彼女は大正六年（一九一七）には東京音楽学校の教授となつていた。

● 序・甦つた悦び

大正五年五月二十八日午後二時から、東京音楽学校の恒例の春季演奏会が同校奏樂堂に於いて開催された。プログラムは、同校オーケストラの管弦樂演奏をはじめ合唱、独奏と多ジャンルにわたつており、ペッツォルダ夫人、シヨルツ、高折宮次、弘田龍太郎、中田章などと並んで、管弦樂付きピアノ演奏として久野久子の名を見出すことができる。

この時の彼女の演目は、ショパン作曲ホ短調コンサート（作品十二）、つまりショパンのピアノ協奏曲第一番である。この曲は全楽章を演奏するのに普通四十分近くを要するので、この会のように九つものプログラムをかかえた演奏会で全楽章を弾いたとは思えないのだが、今日にすることができる資料ではそのあたりが定かではない。しかし久子はおよそ半年後の演奏会でもこの曲を弾いており、そのプログラムには明瞭に第一楽章と記されているので、おそらくこの五月の音楽会でも第一楽章のみを演奏したのであろう。いずれにしろ当時のわが国のピアノ演奏界の平均的な力量を考えると、大曲であり難曲であったことは言うまでもない。

またこの演奏会のプログラム五番には、ピアノ独奏として講師・小倉末子の名がある。彼女は四年にわたる海外留学を終え、この年四月二十三日に帰国したばかりであった。この演奏会では、バッハの前奏曲とフーガ（リスト編曲）を披露している。

久子と小倉末子は、この後当時の日本を代表するピアニストの双壁として比較して語られることが多かった。いわゆるライバルというように新聞・雑誌や周辺の人々が騒ぎたてたのであるが、肝心の本人同士がお互いをどのように見ていたのかは明らかではない。ただ久野久子を語る上で小倉末子が欠かすことのできない存在であることは間違いないので、第2章で小倉のことにはくわしく触れてみたいと思っている。

ともあれこの演奏会は、当時の代表的な音楽誌『音楽界』第一七七号（大正五年七月号）に次のように紹介されている。

「五月二十八日午後二時から校内の楽堂で催さる。ここで無くては見られぬ修養ある聴衆が堂に満ちてゐた。奇禍に遇つて再び楽壇に立つべしと信じられざりし久野ひさ子教授のピアノの全快後初公演と新婦朝の小倉末子講師の初演奏あり。」

記事中に久子を教授と記しているのは助教の間違ひであるが、「修養ある聴衆が堂に満ちていた」という表現は当時の洋楽音楽会の有様を巧みに表わして興味深いものがある。そしてその聴衆の一人が当時三十八歳の少壮物理学者、寺田寅彦であつた。彼の日記の大正五年五月二十八日（日）の項に、次のようにある。

「晴、午後貞子と上野音楽学校の演奏会に行く。新婦朝の小倉氏の独奏もあり。」

貞子とあるのは寺田の長女で、夭折した最初の妻・夏子の遺児、この時十六歳であつた。

寺田寅彦は若い頃から洋楽に親しみこの分野でも趣味人として知られるが、また師・夏目漱石の「洋楽へのアクセスポイント」⁽¹⁾でもあつた。『吾輩は猫である』に登場する洋楽通の理学士・水島寒月のモデルは寺田寅彦である。寺田の日記には、この大正五年五月の演奏会の他にも二カ所、久野久子の出演した演奏会についての記述があるが、それらについては別の章で触れる。もう一人「修養ある聴衆」をあげるとすれば、この頃めきめきと頭角を現わしてきた楽壇の旗頭の一人、大田黒元雄であろう。大田黒は、その活動の拠点として同志の人々と創刊した音楽研究・評論誌『音楽と文学』の第一巻五号でこの音楽会をとりあげ、次のような評を記している。

「公園の緑は随分深くなって居た。そして満員の会場は恐ろしく蒸暑かつた。(略)久野氏の洋

琴はしつかりして居た。曲はショパンの司伴奏であった。然しショパンを弾くならエチュードやノクターンの方がいい。ショパンの天性は司伴奏やソナタに適して居ない。(略)小倉氏のはバッハハリストのプレリユードとフーガで深い技巧を見せるものであった。流石に垢抜けのしたところが示された。タッチの至極明快なのが何よりもうれしかった。」

この時早くも大田黒の小倉末子への評価は高いものの、久子に対する評価も決して低いものではなかった。彼の久野久子評が決定的に厳しくなったのはこの五月の演奏会の半年後のことであつて、それについては後述する。

話を『音楽界』の記事に戻すと、そこには久子がこの演奏会以前に「奇禍」にあつて再起不能と思われていたと書かれている。この「奇禍」は本章が対象とした時期からはいささか遡ることになるが、話のつながり上ここで概要を述べておこうと思う。

●大正四年一月の「奇禍」

『音楽界』記事中に「奇禍」とあるのは交通事故で、久子は大正四年(一九一五)一月二十一日に、東京赤坂の葵橋電車停留場付近で走行中の自動車にはねられ、重傷を負った。この日には疑いのない事実であるが、これを誤って伝えている例がある。その一つは増井敬二著『日本のオペラ』で事故の日が一月十二日と記されていて、これはおそらく二十一と十二が類似した表記であることから生じたケアレスミスであろうと思われる。

女流音楽家の奇禍

▽薄倖なる久野久子女史

二十一日午後十一時、東京赤坂区赤坂三丁目、久野久子女史の寓居に於て、彼女を待てる一人の婦人が自動車に乗り込まれて入居者に押し廻り、車は路傍にて事故を受け、人も住所氏名も不明なる事だ。

▲写真入り廣告 掲載 たるも、此の不自在なり、恐ろしき事だ。

▲自動車に出合 たるも、此の不自在なり、恐ろしき事だ。

▲天稟の才にや 上達者 たるも、此の不自在なり、恐ろしき事だ。

▲除程の重慮 久野久子 たるも、此の不自在なり、恐ろしき事だ。



シムアップ致すの故へ受けたるが如く、
り、系統的の天才を有す。女史は、其の能
赤坂区赤坂三丁目、久野久子女史の寓居に於て、彼女を待てる一人の婦人が自動車に乗り込まれて入居者に押し廻り、車は路傍にて事故を受け、人も住所氏名も不明なる事だ。

▲實に思ひ掛ける事でした
▲上原まろ子女史
赤坂区赤坂三丁目、久野久子女史の寓居に於て、彼女を待てる一人の婦人が自動車に乗り込まれて入居者に押し廻り、車は路傍にて事故を受け、人も住所氏名も不明なる事だ。

久子の奇禍を報道する東京朝日新聞（大正4年1月24日）

もう一つは中村絃子『ピアノリストという蛮族がいる』に書かれているが、事故の日が「大正三年の七月某日」となっていて、これはまったくの誤りである。どうしてこのような突拍子もない年月が記されたのかは出典が示されていないので不明だが、後年の久子の自殺報道記事中に交通事故を「大正四年の夏」としてあるものがあり、それと何らかの関連があるのかもしれない。

また事故現場は前述した通り葵橋の交差点、現在の特許庁の南西角に接したところであるが、これを約一五〇メートル西方の赤坂溜池交差点、あるいは一キロ以上離れた赤坂見附とする不正確な記述も見られる。事故の日にはちや場所については、当時の主要新聞は筆を揃えているのでいずれか一紙でもチェックすれば済むことであると思うのだが、その労も嫌がつて文章を書く人がいるのは困りものだ。

ともあれ、以下少し詳しく事故の経緯を追ってみる

が、使用した資料は大半当時の新聞記事で、具体的には東京日日、東京朝日、読売、都の四紙みやこを照合して実相の究明を試みてみた。ただし、事故に遭うまでの当日の久子の足取りは四紙とも大同小異ゆえ、特に典紙を明示せずに叙述する。

一月二十一日、久子は神田区一橋の東京音楽学校分教場へ赴き、そこで授業を行った。この分教場は現在の地下鉄神保町駅の近くにあったが、当時このあたりは女子職業学校（後の共立女子）、高等商業学校（一橋大学）、外国語学校（東京外国語大学）、さらに少し北には東京経済学校専修学校（専修大学）などが連なる一大文教エリアであった。音楽学校分教場は、明治三十一年（一八九八）に開設され、選科の一部と小学唱歌講習科が本校から移された。選科は本科（専修部）とは別に一〜三科目ぐらいだけを学びたいという生徒のために設けられた制度で、入学も容易であった。そのため明治の終わり頃には音楽学校予科・本科を受験するための予備校的な役割を果たすようになっており、例えば梁田貞や中山晋平なども音楽学校受験を目指して、他の私立の音楽学校やこの分教場に通ったと評伝などに記されている（3）。

一橋分教場には、上野の本校から言わば出張授業の形で教師が派遣されたり、上野を卒業したものの進路の定まらない修了生が教鞭を取ったりしていた（山田耕筈もわずかの間だが分教場で教えていたと年譜にある（4））。久子は職掌として定期的に分教場へ赴き、ピアノを教えていたのである。

話を戻すと、一月二十一日久子は授業を終えて夕刻五時に分教場を後にし、赤坂溜池の友人で

ピアノの弟子でもある上原町子宅を訪れた。上原宅は溜池二番地となっていて、当時の地図で確認すると電車が走っている大通り（外濠通）からほんの十メートルばかり入った小路に面しており、葵橋停留場とは目と鼻の先にあつた。後の上原町子の証言によれば二人は四方山話に興じたようであるが、久子は時折この冬に伊豆で転んで痛めた左の手に薬を塗ったりなどしていたとのことである。

歓談は深更にまで及び、久子が上原宅を辞去した時は夜の十一時近くになっていた。そして数分で電停に行き着いたところに、思わぬ奇禍が久子を待ち受けていたのである。

ところで、私は最初この事故発生時刻には相当の疑問を持った。現代の東京ならいざ知らず、この大正初期に深夜女性が単独行動をするというのがどうにも合点がいかなかった。第一そんな時間に市電が走っているというのも怪しいものであると。けれどもそれは私の認識不足で当時市電は早朝五時から深夜一時過ぎまで運行しており、おまけに路線によつては真夜中までラッシュ状態であつたと新聞が伝えている⁽⁵⁾。この頃すでに、東京は眠らない街になりつつあつたといふことであろう。久子が葵橋電停に向かつたのが電車に乗るためであつたことは、彼女の所持品の中に回数券があつたことで確かめられ、何もおこらなければ、市電を乗り継いだ彼女はその日のうちに千駄木林町の自宅に帰り着いたと思われる。

ともあれ、そのようなことで事故発生時刻に疑問を抱いたとしても、上原町子が久子の同宅辞去時刻を明瞭に証言している以上、これは動かすことのできない事実と言つてよい。